

「インドネシア大学派遣参加報告書」

京都大学工学部建築学科2年 堀口 裕大

私がこのプログラムに参加した理由は、急速に発展するジャカルタの街を見たかったからと、インドネシア語に興味があったからである。

ジャカルタは大都会だと聞いていたが、実際のジャカルタは僕が想像している以上に都会だった。具体的には、高層ビルが広範囲に存在し、ジャカルタの市街地も非常に大きかった。まず最初に驚いたのは、空港が非常に綺麗だったことである。私は空港を見て、ジャカルタという街は想像以上に発展しているのではないかと期待した。このプログラムは午前中にインドネシア語の授業があり、午後は文化体験をしたり、UI の日本語学科の授業に参加したり、発表の準備をしたりする日と、半日自由行動の日があった。私は、午後がフリーの日はもちろん、文化体験後の時間や、発表準備までの空いた時間も利用して積極的にジャカルタへ足を運び、ジャカルタの高層ビル群や高級住宅街、日本人街、中華街などを散策した。移動中にタクシーや電車から街を眺めていると、高層ビル群が広範囲に多数存在していることに驚いた。また、一番驚いたのは大型ショッピングモールの数である。ジャカルタ市街地はもちろん、その郊外にも大型ショッピングモールがいくつもあり、賑わっているのを見て、ジャカルタ都市圏の発展と、中間～富裕層の増加を感じた。多くの建設中のビルや公共交通機関を見て、今後のジャカルタの発展を楽しみに思い、近い将来にまた訪れたいと思った。

私はこのプログラムで他にも多くのことを学んだ。例えば、インドネシアの伝統文化である。私はインドネシアの伝統文化に全く無知だったが、本プログラムの午後の授業の文化体験を通して様々な伝統文化に触れることができた。日本でインドネシアの伝統文化に触れる機会は少ないため、実際に伝統文化を体験できたのは貴重な経験だった。また、インドネシア語の授業もとても楽しかった。初めて勉強する言語だったため、日に日に知っている語彙や表現が増えてインドネシア語を話せるようになるのが実感しやすく、授業に積極的に参加することができた。また、現地の人とインドネシア語でコミュニケーションが取れた時は、語学学習の楽しさを感じ、もっと会話できるようになりたいという学習へのモチベーションにもつながった。2週間という滞在中でインドネシア人と毎日一緒に過ごすことで、インドネシア人の習慣や価値観も知ることができた。その中でも特にイスラム教に基づくものが多かった。私はイスラム教について教科書上のことしか知らなかったため、教科書には載っていない習慣や考え方や教科書とは違ったものを色々教わって、自分がイスラム教やインドネシアについて無知だったことを実感した。それと同時に、異文化を知るためには、どんな勉強をするよりも、異文化に直接触れることが最も重要だということを改めて思い知った。また、異文化に対する無知は時として失礼になるため、インドネシアに限らず他の国の文化にも積極的に触れて、異文化に対する理解を広げることが大切だと思った。

このプログラムでは UI の生徒にとっても感謝している。彼らは春休みではなく普段は授業があるにもかかわらず、空いている時間のほとんどを私たちのために使ってくれた。私たちが大きなトラブルに巻き込まれることなく、楽しくて充実した生活を送れたのは彼らの支えがあったからである。2週間という限られた時間ではあったが、彼らと過ごした楽しい時間は一生の思い出である。UI の生徒との仲は今後とも大切にしていこうと思う。また、今後もインドネシア語の勉強を続けて、再びインドネシアに行ったときは、インドネシア語で感謝の気持ちを伝えられるようになれたらいいなど思っている。

将来の進路について、私は建築士として海外(主に東南アジア)の発展や開発に携わりたいと漠然と考えていたが、このプログラムを通して、ぜひいつかインドネシアの発展と開発にも従事したいと思った。渋滞や洪水、人口過密といった問題を抱えるジャカルタの生活環境の改善や、ジャワ島以外の都市の発展に建築士として携わることが今の私の将来の夢である。